

いたちがわらばん

通刊19号

鮎川・独川・川原番・瓦版 02秋号



版画 宗森英夫

水神橋と水神様

水神様は 見つけたい

水神橋脇に、古い石の祠(神をまつる小さなやしろ)があるのを見たことがありますか？

水神様は豊作をもたらす神様として祭られ、バチがあたらないようその周りを皆できれいにしていました。また、人間の豊作(安産多産の神として信仰の対象)にもなっていました。雨が降らずに水枯れになると、そこで雨乞いもしました。その方法は、時代や地域によつてさまざまで、鉦かねや太鼓を打ち鳴らして大騒ぎでお願いを聞き届けてもらったり、唄や踊りで神を慰めたり、水を掻き回して神を怒らせて怒りの雨を降らせてもらったり・・・日照りで作物が実らないと生きていけない人々は、必死で神に願いごとをしていました。

一方、川は大雨で洪水になると田畑や家を流されて、人々の命を奪う恐ろしい場所でもありました。古くから領地の境界になっていた川は争いの種になったり、水利権争いもあり、水死者や戦死者の霊を供養する行事も行われていました。川に灯籠を浮かべて川原で供養する灯籠流しの場所が、今も水辺に残してあるのを知っていますか？

川に感謝すること、畏怖の念をいだくこと、そして、水を大切にするように、よこさないようにと水神様がいつも見ていると誰もが信じていた時代があったのです。村のはずれのお地藏さんや川のほとりの水神様が、栄区には今も残っていて人々の暮らしの変化を驚きの目『見つけたい』のではないかと思われます。

(つづ)

学校の活動報告(8)

『せせらぎのある まち 公田』 公田小学校より

栄区に流れるせせらぎやいたち川は、公田小の子ども達にとって憩いの場所です。学習の中でも、いろいろな学年が川とかかわっています。5年生と3年生の子ども達の活動の様子を紹介します。

6月3日に荒井沢市民の森の田んぼで、田植えをさせていただきました。たびをばいて、田んぼの中に入ったら、土と水でひんやり気持ちよかったです。けれども歩こうとすると転んでしまいそうでした。

苗を植え始めると、最初は楽々と思ってやっていたのですが、三列目に入ったらとてもつかれてきました。五列ぐらいいやりましたが、終わったときは正直言って、こしがこきとなりました。でも、こんな体験はもうできないだろうから、とても心に残っています。そして、終わった後に川に入り、足についた土を落としたときの気持ちよさといったら、ひんやりとさわやかで最高でした。最後に飲んだ麦茶の味も、また最高でした。どれもこれも、とっても楽しくて心に残っています。(五年 女子)



愛護会の活動報告(8)

公田ワクワクしぜん調査たい

わたしたちは、公田のまちで自まんでることを見つけるために、公田ワクワクしぜん調査たいを作り、荒井沢市民の森のほうへいきました。そこではアジサイがさいいて、トンボが卵をうんでいました。川のそばの、高いがけから水がたれて川にながれこんでいました。おくのほうにいくと五年生がうえた田んぼもありました。

次のたんけんでは、水の中の生き物のことをもっとよく調べたり水べの動物のことや川のながれなどをしらべたいと思います。(三年 女子)

しぜんのかたまり「いたち川」

ぼくたちのグループは、いたち川グループです。この前、一回目のたんけんに行きました。公田小からあらいさわ市民の森までのコースです。本当は支流の水源をさがしたかったんだけど、時間がなくて調べられませんでした。次のたんけんで行ってみたいと思います。みんなが知っている下流の方は、あまり水しつはよくないけれど、上流の方は、トンボかたまごを生むぐらいいすきとおっています。

これからできれば、いたち川のせいそう活動にもさんかしたいなと思っています。「横浜だって高そうビルとかだけじゃなくて、しぜんとぶれあえる町だってある。」と言うことを、横浜が都会だと思こんでいる人たちに教えてあげたいです。(三年 男子)

洗井沢水辺愛護会より

桂公田町会女性部では、洗井沢川せせらぎ緑道の天神橋から上流300mにわたって、緑道清掃を、年三～四回行っています。写真を参照ください。

また、いたち川沿いに「川に花いっぱい運動」を展開し、町会員十名がボランティアとして参加しています。春はパンジー、夏はポーチュラカなどを天神橋花壇に植え置きかう人々に喜ばれています。

いたち川の水は最近汚れてきたのか、あるいは鯉が食べるのか、小魚が減りました。五月頃になると小さな魚がとびはねていたのに、最近は見られません。酷暑の今年は子供たちが水遊びにきていましたが、ちょっと不安で考えさせられました。心ない人によって、川がよごされることあるからです。そこで安心な水遊びの場所でカルガモ、アヒル、小魚も住める川にしていきたいのです。

昨年暮、雌アヒルが突然、天神橋下流に現われ、夜鳴きするので、近所迷惑でしたが、今は慣れ、最近、風間通い雄がきて夕方ゆくほほえましい光景です。産卵もありますが、カラスにたべられ、殻だけが川面を流れていたり、花壇にも残っています。

現在、川の整備が進んでいるもののいまだに整備着手の出来ない箇所の一つに学校橋があります。住民とも話しあって実行する時期にきているのではないのでしょうか。今年、学校橋から石橋にむかって整備しつつありますが、なぜか学校橋だけ手をつけられず現在にいたっているのです。

一日も早く川沿い通路を歩行者が自由に歩け、いたち川のせせらぎの音、小鳥、魚類、カルガモ、アヒル等を眺めながら、ストレス解消の川としても、多くの人たちが明るく心豊かに生活できる町の空間の川となるよう、心から願っています。(加藤トシ子)



発行年月
2002年10月

(通刊19号)

発行：独川OTASUKE隊(いたちがわおたすけたい)

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19

栄土木事務所下水道係

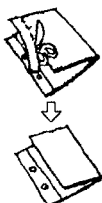
TEL 045-894-8331 FAX 045-895-2260

〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1

TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421

(お便り・お問い合わせはこちらまで)

この部分を
取り外し
て便利
です。



笠間地区の洪水災害について

笠間町在住の鈴木正夫さんと石井昭彦さんに昔の洪水の話伺いました。

昔の笠間地区は、田んぼが多く、住居は小高い丘のふもとに建ち並び、現在の地方の農村風景と同じで、たち川に沿って築堤が連なっていました。

現在は、田んぼを埋め、昔の堤防より周辺が高い掘り割りの川になっていて、昔の面影はありませんが、県道原宿六浦線と大船駅周辺地区は現在でもあまり地盤が高くなく、洪水の脅威を感じています。

昭和30年代に、柏尾川周辺の田んぼは、ほとんど埋められ、工場が出来た頃から大水が多くなったように思います。

大水が出ると、三井東圧(現在は跡地)から線路向こうの柏尾川までと、法安寺から京浜女子大(現鎌倉女子大)まで一面の池になっていました。その頃勤め先が、笠間町にあった田中ダイカスト(現在は無い)でしたので、守衛所から工場まで泳いで渡った記憶があります。その頃、洪水が多かったこともあり、大水が出ると、各家では畳や家具などを2階に上げる位置を決めてあり、要領よく作業をしたように思います。

私が昭和40年代、消防団に入っていた時のことですが、大水が出て“ぐるぐる橋”(笠間橋)の線路向こうで、おばあさんが家の中に閉じこめられたことがありました。ボートで救出に向かったもののなかなか進まず、国鉄の塀の忍び返しを使ってたどり着き、おぶって助け出したことを記憶しています。

子供の頃にも大水は出ました。その頃のたち川は、堤防があり、2度ほど決壊したことがあり、そのたびに山(デニーズの東側)を切り崩してトラックで土を運び、土俵で堤防を造りました。

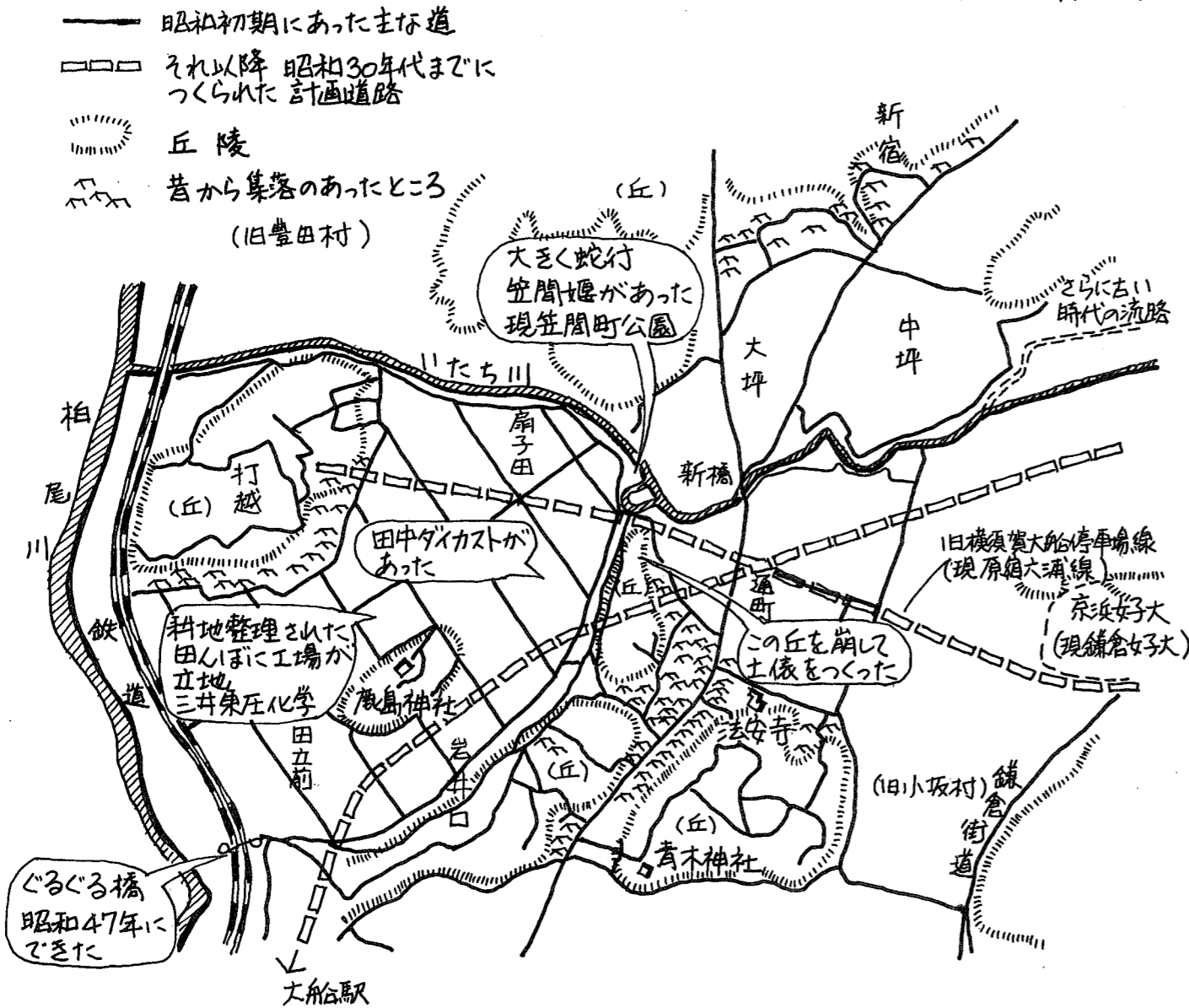
稲作のための堰は、笠間堰と飯島堰がふたつあり、川縁を鎌倉石で築き、川底の岩盤に穴を掘り、そこに木の支柱を立てて土俵で造ってありました。大水の後の楽しみは、その当時この周辺に多かった養魚場から流された金魚や鯉をすくいに行くことでした。

昔、笠間には田んぼがたくさんあり、保水能力があったせい、多少の増水では大きな被害にならなかったようです。しかし開発が進むにつれ、田んぼは姿を消し、代わりに洪水に見舞われるようになったそうです。

現在では、笠間ポンプ場や河川改修の効果もあり、昔のような大きな被害は少なくなってきました。(ミジンコ)

昔の笠間町あたり

(参考：本郷反別入図(昭和4年)ほど)



切りとり線

リレイトークその十八

蒲焼きは露と消え

その日、私達は胸長をはいてイタチ川のゴミを拾っていた。川底に沈んだ空き缶や空き瓶、泥で埋もれた二ル袋など、およそふるさとの川に似つかわしくないゴミの数々。うんざりしながら拾っていると、私の目の前をウナギと泳いで行く奴がいる。ウナギだった。それも特大のウナギである。でも、様子がなんだか変だ。時折白い腹を見せてやっとなが泳いでいる。ウナギの長い胴体を両手で抱くと簡単に持ち上がる。特大と言っよりは巨大が相応しい。それにかんりの重さがある。



「やったー!」ミ拾いは止めて、みんな蒲焼きパーティーだ!もうゴミ拾いはどうでもよくなつた。嘘も方便、仲間たちには大格闘の未捕まえたと言っておこう。それにしても、でかいウナギだなあ。まさか川掃除のご褒美じゃあるまいに。」

バケツの中の巨大ウナギにみんなは口をあぐり。「其処の寿司屋で捌いてもうらたら?」私と同じ樂觀主義者が言つた。「こらりの水質じゃ、喰えるかどうかなあ?」悲観論者もちゃんといふ。格闘の未取り押さえたにしては元気がない。何か悪いものでも喰ったのだらうという説が大勢を占めるや、川に返して食物連鎖の摂理に従うべしとの結論。

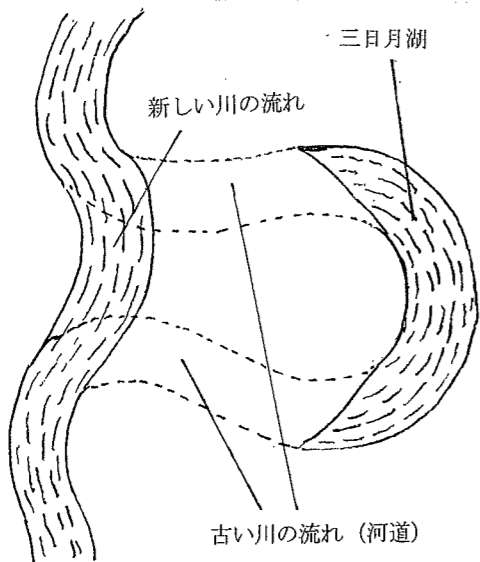
それにそんな元気がないウナギを喰っても、人間様に元気が出るわけない。多勢に無勢、とつとつ蒲焼きの夢は敢えなく消えた。しからば巨大ウナギの写真だけでも残そうと、あらためてバケツを覗き込むと、長さは悠に八〇センチは越えている。

蒲焼きにしたら、何人前の鰻丼が出来るかしら?川に戻されたウナギは泳ぐ力もなく、白い腹を上にして大往生。それにしても、こんな巨大ウナギを育てるいたち川は凄く!川のほとりに蒲焼きの屋台が並びのは、そつと遠い先のことではないと思えてきた。その後、愛護会の飯田氏が計った処、体長八五センチ、重さ九五〇グラムとの事でした。(マンボウ)

河川用語のまめ知識 その三

『川曲り』

川が蛇行(へびのよう)に曲がらへねて流れるしたとき、くびれた部分がくっついて新しい川の流れができ、古い流れの取り残された部分が三日月型の水溜まりになることがある。このようにしてできた水溜まりを三日月湖と呼ぶ。左図参照



昭和三〇年代頃のたち川流域の地図を見ると、新橋の下流で大きく蛇行して、現在、笠間町公園になっているあたりに三日月湖があった。そこを埋め立てて公園ができた。(ミジンコ)